

「赤レンガ酒造工場シンポジウム」について

赤レンガの建物について造詣の深い専門家の方々にご講演をいただくとともに、酒類総合研究所「赤レンガ酒造工場」（東京都北区滝野川・1903年築）の文化財的価値にも配慮した上での活用法について、有識者の講演会と関心をお持ちの方々も参加したパネルディスカッションを平成23年11月3日（文化の日）に「赤レンガ酒造工場 旧ボイラー室」で開催いたしました。その際の講演内容とパネルディスカッションの概要と意見等をお知らせいたします。

[シンポジウムの模様]

平成23年11月3日、午後1時より「赤レンガ酒造工場」シンポジウムを開催しました。一般参加者24名は「赤レンガ酒造工場」に関するビデオを見た後、2班に分かれて工場内の見学を行いました。その後、午後2時より下記の4題の講演を聴き、午後4時からパネルディスカッションに移り、午後5時に散会となりました。

記

講演演題等

演者：北翔大学 水野 信太郎 先生

演題等：「酒類総合研究所赤レンガ工場における建築技術上の新旧両側面」

赤レンガ建築物の見所と「レンガ」基礎知識の紹介、「赤レンガ酒造工場」の特色（寸法の大きなレンガ（古い側面）と機械成形されたレンガと小口積（こぐちづみ）（新しい側面）等）について説明し、個々の特色（みどころ）が利用されている箇所（窓枠や建物のコーナー等）について分かりやすく解説していただいた。なお、「赤レンガ酒造工場」は建設当時の新しい技術とそれまでに培われた伝統に基づき、それらが共存した貴重な建物であることを指摘された。



演者：日本診断設計株式会社 長谷川 哲也 先生

演題等：「赤レンガ酒造工場の建物について」

建物をめぐる人物(渋沢栄一、妻木頼黄)の紹介、酒造工場としての機能を盛り込んだ建設思想を示した文献と実際の調査での結果との関係を解説し、現在の建物が直面している問題点とその修復に役立つようなレンガの劣化と補修法について説明していただいた。なお、「赤レンガ酒造工場」は随所に酒造りのための工夫がなされているだけでなく、建築当初の技術の保存が美しく残されている『ちょっとすごいところ』であることを指摘された。



演者：株式会社横浜赤レンガ 坪井 純子 先生

演題等：「横浜赤レンガ倉庫の紹介」

今年創設 100 年を迎える「横浜赤レンガ倉庫」が現在、文化、商業施設として年間 500 万人前後の人を集めるに至るまでの経緯(国と横浜市(横浜みなとみらい 21)の関係、横浜市と横浜赤レンガ倉庫との関係)と建物の維持と集客力維持の難しさ、さらに歴史的建造物が光を浴び続けるための地域を巻き込んだ同時代性の重要性について説明していただいた。なお、「横浜赤レンガ倉庫」の活用法はひとつの例であり、地域との連携により「赤レンガ酒造工場」の今後について考えていくべきであると指摘された。



演者：公益財団法人日本醸造協会 石川 雄章 先生

演題等：「赤レンガ酒造工場の功績について」

日本酒醸造の研究成果の多くが「赤レンガ酒造工場」を通して生まれたこと、その成果が研修・講習と言う形で全国の醸造家に伝えられ、現在では三世代にわたりこの場で研鑽を積まれている方がいること、さらにはこの建物がお酒に関連する技術者、技能者の心のふるさとであることを紹介し、日本の食文化のモニュメントとしての重要性について説明していただいた。なお、「赤レンガ酒造工場」は醸造家の世代を超えたシンボルとしてだけでなく、生きた(酒を造り続ける)状態での保存と活用を期待したいと指摘された。



[パネルディスカッションの概要]

パネラー：講演者 4 名に飛鳥山自治会長(鈴木昭次氏)、滝野川馬場自治会長(加藤和宣氏)を加え、司会として酒類総合研究所情報技術支援部門長(後藤邦康)が進行を行った。

進行方法：一般参加者からの質問状および質問に対する応答形式。

主な質疑応答：

・歴史的・文化的価値

1) 旧翹室の壁の一部のレンガがアーチ型の模様について：

[長谷川]おそらく、壁面に窓か出入口等があったものを埋めたもので、うまくレンガを切り込んで埋めたため、現在では装飾のようになっている。

2) 白いレンガの造り方について：

[水野]耐火性の高い白い土を素材に、白く焼きあがる金属の釉薬を塗って、乾燥した後、通常より 200℃ほど高い状態で焼き上げている。焼いた所は浅草で、おそらく 2 代目鳥居庄右衛門の作と思われる。日銀本店旧館地下(辰野金吾設計)と同じものと考えられる。辰野・妻木両先生は国会議事堂の設計競争等で良きライバルではあったが、辰野先生の紹介で、妻木先生がこのレンガを使用することを決めたと考えられ、レンガの希少性だけでなく、妻木・辰野両先生の間を繋ぐ貴重な資料である。



3) 他の建材と比べたレンガのライフサイクルコスト・エネルギーの評価：

[長谷川]ただ高く積む等の建物では強度が足りずに倒れる場合もあるが、しっかり造ったものの強度は高く、建物自身のライフサイクルは長くなると思っている。例えば、古代ローマの建物は全部レンガ造りであるが、2000 年を経過している。修繕は必要であるが、タイルを貼り付けた場合に比べると修繕コスト等も低くなる。

[水野] 壁としての耐用年数では木材ではその樹齢の分、例えば、80 年育った木の木材では 80 年になる。鉄骨では 500 年、石では平安時代から残っているものもある(岡山県雲石神社の灯籠)。レンガの場合、濡れたり乾いたりを繰り返さなければ、石より耐久性があるといわれている。

・地域との連携等

1) [水野]この建物は 100 年以上の歴史があり、この地域の皆さんの生活の中でどのように見てきたのか：

[加藤]夜になるとライトアップされ、夜間でも公園を気持ちよく散歩でき、防犯上も頼もしい存在である。



[一般 A]このような歴史的建造物はぜひ後世まで残してほしい。レンガ造りを生かしたりサイタルやお酒に関

する情報の発信基地として使用し、地域の活性化に役立ててほしい。

[鈴木]周辺自治会の住民にとって、醸造試験所は懐かしい名前、試験所前の通りの名にはこの建物にちなみ「赤レンガ通り」と名づけさせていた。周辺には北区博物館、中央図書館等の施設があり、飛鳥山や赤レンガを含めた散策コースがあれば、このPRにもなると思うので、ぜひ検討していただきたい。



[一般 B]現在の活用方法(講習等)を止めざるをえない場合は、他の利用法(横浜赤レンガ倉庫のような商業施設等)を考える必要があるが、現状をぜひ続けていただきたい。

[一般 A]毎年見学会に参加しているが、このような討論会は初めてで、横浜赤レンガ倉庫のような商業施設としての利用等は初めて知った。歴史的な価値は、一度壊してしまうと元に戻すことはできない。



[坪井]横浜赤レンガ倉庫はひとつの例で、歴史的、文化的、その地域での存在等のいろいろな価値を多面化、多様化して相乗効果を造り出すことが重要である。いろいろな活用、地域との共生についてそれぞれの良さを関係者の皆さんがここならではのものとして作っていく必要がある。

[一般 C]半田市の旧カブトビールの赤レンガ工場の活性化を手伝っているものであるが、調べれば調べるほど妻木先生の作られた建物のすばらしさがよく分かってくる。しかし、地元の人たちには単なる建物としか理解されていなかった。歴史的に見て最高品質のものが、今ここにしかないということを知ると敬意とか愛着とかが出て

くと思うが、それを伝える方法が難しい。赤レンガ酒造工場の良さをより多くの人に伝えるように努力してほしい。

注) 発言者の敬称は略させていただいております。また、「赤レンガ酒造工場」以外の酒類に関する一般的な質問については掲載を割愛させていただいております。

アンケート結果

アンケートの内容と集計結果

- ・満足度(回答数 22) : 満足 15、やや満足 7、普通 0、やや不満足 0、不満足 0
- ・「赤レンガ酒造工場」の保存について(回答数 24) : 必要 24、不必要 0
- ・保存方法(回答数 24) : 建物を活用しながら保存 24、現状を保存 0
- ・活用方法について(複数回答可、回答数 36) :
 - 酒造を活かす 15、公共施設 8、商業施設 3、その他 10
 - その他の意見 : ①酒造を活かしつつ、お酒関係のイベント、お酒等の販売(2 回答)、②酒類文化の中心地として博物館に、③各活用法をバランスよく
- ・認知度(回答数 23) : 初めて赤レンガを知った 7、赤レンガの存在は知っていた 6、見学会等に参加経験あり 10
- ・その他 ご意見(要約)等
 - 酒造りあつての生きた赤レンガ酒造工場であるという意見が多くあった。施設の有効活用として周辺施設とリンクした開かれた場の提供とともに、若者層へも関心を持ってもらえるような企画を盛り込んだ催し、酒造りを含む公開講座やできた酒の販売、または地元商店街との協力での新製品の開発等を行うべきとの意見があった。